

明治時代の「元禄模様」の特質 —江戸時代の小袖模様との比較から—

関西学院大学
樋口温子

明治38年(1905)から三越が宣伝し、ブームを巻き起こした「元禄模様」は槌車や葵、市松などのモチーフを用いた派手な模様であったといわれている。元禄模様については、神野由紀氏、岩淵令治氏による先行研究で、その創出の経緯について研究がされてきた。三越の理事、高橋義雄が戦勝景気の中で派手な模様を流行させようと考案したのが元禄模様であったこと、三越が「元禄会」の第2回集会に深く関わったことが明らかにされている。しかしこれまで染織図案そのものについては十分な検証がされてこなかった。

元禄模様には江戸時代の小袖と共通したモチーフが使われているが、その表現には異なる点がみられる。これは江戸時代の小袖のモチーフを部分的に取り入れ、明治の好みに適うように再構築したためと考えられる。そこで本発表では、両者の表現方法をモチーフごとに比較し、その相違点を示すことによって明治時代の染織図案の特質を明らかにする。江戸時代の資料としては現存作例および小袖雛形本を用い、明治時代の資料としては千總所蔵の型友禅と三越のPR誌『時好』に掲載された図案を用いる。

まず『時好』の記事から、明治時代に元禄模様と称された図案のモチーフを確認し、従来から指摘されていた市松、槌車、葵の他にも、網干や蝶が多く用いられたことを指摘する。次に、元禄模様の源泉となった江戸時代の小袖模様を明らかにし、明治時代の元禄模様との比較を行う。既に国立歴史民俗博物館『身体をめぐる商品史』(2016)で「舳舟水草模様小袖」(国立歴史民俗博物館蔵)が『時好』第3巻第8号に掲載された「元禄模様の友禅モスリン」の意匠のもととなっていることが示されたが、本発表では新たに『時好』第3巻第11号に掲載された友禅縮緬の図案が、元禄会で展示された伝桂昌院所用の「綸子地梅樹竹模様染繡振袖」(護国寺蔵)を模したものであることを指摘する。市松、槌車、葵、網干、蝶といったモチーフも、江戸時代中期の雛形本に多くみられた。このように元禄模様には厳密に元禄期には限定できないものの、広く江戸時代前期から中期の小袖と共通したモチーフが多く転用されていることが知られる。さらに両者を比較すると、明治時代の元禄模様では、江戸時代には単独で用いられていた網干や葵などのモチーフの中をさらに市松や弁慶縞で充填する表現がみられた。それにともない、輪郭となるモチーフの曲線に沿うように中の市松を変形させる、西洋のデザインの影響を思わせる新しい表現もあらわれた。また蝶においては江戸時代にはみられない幾何学的な表現がみられ、元禄模様という名のもとでハイカラな図案が出現したことも明らかになった。明治時代には文芸性や吉祥性を味わうよりもむしろ、江戸時代前期から中期のモチーフをパズルのように組み合わせ、新しい表現に挑戦する実験的な感覚のもとで新たな意匠が生み出された。